



大豊建設は3月31日、創立70周年を迎えた。この間、特許技術のニューマチックケーソン工法とシールド工法を武器に建設業界で確固たる地位を築いた。100年企業に向けて大隅健一社長は「得意技術を生かすことができる人材の確保と育成が重要になる。そのために大豊の魅力を積極的に情報発信していく」と意気込む。

——「技術の大豊」を掲げてきた

「技術に立脚し、技術に裏打ちされた会社としてスタート。パイオニアでもある2つの得意工法を柱に、確かな技術で社会のニーズに応えてきた。他社より秀でる技術を武器に、大きなプロジェクトには声をかけてもらっている。最近はゲリラ豪雨など災害が頻発しているが、浸水対策として有効な地下貯留施設（一時的に雨水をためる施設）など防災関連工事が増えており、我々の技術が生きる」

——出番が増える

「土木は地下工事が多い。しかも大深度、大断面になっている。40層より深い地下に造られる立坑工事にはケーソン工法、



大隅健一社長に答えるインタビュー

トンネル工事にはシールド工法が期待されている。ケーソン工法は地下に構造物を造るときに有効で、ポンプ場や橋梁基礎に加え多様なニーズに対応している」

——建築部門は

「土木事業に匹敵する規模に成長、今では売り上げの半分を占める。まさに車の両輪で、最近は物流倉庫やホテル、商業施設、学校など多分野で仕事を任されている」

——100年企業に向けた取り組みは

「大豊ブランドでもある2つの得意工法を継承していくために技術者が必要であり、若い人材を育てる。技術を前面に出しながら働きがいがあり、夢を持てる会社をアピールして人材を確保する。女性を『建設小町』と呼び入れたい。頼もしい女性も働いており、近い将来には作業所長に就くと期待している」

——人材獲得のために課題は

「知名度の向上に尽きる。70周年を機にアピール、100周年時には売り上げを現状の1500億円規模から2000億円に引き上げたい。資格が厳しくなる東証1部の生き残りをかけ技術者集団として必要とされる会社を目指す」